

## 外国語・外国文学と日本人

—— 斎藤兆史・野崎敏 『英語のたくらみ、フランス語のたわむれ』(東京大学出版会 二〇〇四年) を読んで ——

和田正美\*

書評をするのならその本のテーマと評家の関係をはつきりさせることが順序であらうが、私は雑学雑文の徒であつて、外国語・外国文学の専門家ではない。それにひきかへ、この対談集の著者である斎藤兆史氏と野崎敏氏はそれぞれ東京大学で教鞭を執る英文学者であり、フランス文学者である。私のやうな専門家ならざる者が両氏のやうな専門家の仕事を批評することはどんなものかといふ氣もするが、實は私自身、個人的にも、大学教授としての仕事の上でも、英語とフランス語を多少手懸けてゐるし、また、この本の中では、外国語・外国文学と日本人のかかはりについて、専門非専門の區別を超えた興味深い提言が多々なされてゐるので、敢へて手短かな書評をして見ることにした。

本論に入る前に一つ言つておきたいことがある。日本の大学における外国語・外国文学の研究と教育の實態を知らない人にとつてはほとんど

信じ難いことであらうが、英文学者とフランス文学者が本音をぶつけ合つて語り合ふのは珍しいことである。英文学者は英語英文学のみ、フランス文学者はフランス語フランス文学のみにかがらひ、たがひに相手の領域には口を出さないといふ慣行が少なくとも私の學生時代の頃まで一般的だつた。これは明らかに不自然なことである。英佛二つの文化の違いは一般の人が想像する以上に大きい、それでも日本人から見れば両者ともにヨーロッパ文化であり、だから當然この二つは何等かのやり方で對比されなければならない。この本はそれを行つてゐるのであり、そのことだけでも價値を持つてゐると思ふ。

本書は六章に分れてゐるが、「まえがき」にも書いてある通り、實際には語學と翻譯と文學の在り方を問ふ三部構成なので、以下、この構成に従つて調べて行くことにしよう。

日本人にとつて外国語の受容はどういふものであるべきなのか。これは永遠の課題かも知れないと思はれるが、日本人の特徴として屢々言はれて來たことをおさらひすると、日本人は譯讀に熱中し、文法はよく知つてゐるが、會話は不得手であるといつたところであらう。この場合の外国語は主に英語であり、斎藤氏と野崎氏も英語を中心にして論じてゐるが、フランス語及びそれ以外の外国語にしたところで同じやうなものであると言はなければならぬ。

問題はかういふ特徴が最近、一般社會だけでなく、大学の内部でも厳しい批判にさらされるやうになつたことである。私自身の實感としても、日本人が外国語を受容するそのやり方は一つの轉機を迎へたやうである。重要なのは英語を生きた言葉として使ふことであり、今までのやうな役に立たない英語は止めてしまへといふ當世の風潮に斎藤氏も野崎氏も激しく反撥してゐる。ここで私見を記せば、それはさうあつて然るべき

である。野崎氏は「あとがき」の中で次のやうに記してゐる。

「文法」の學習は無駄であり、「會話」ができない人間を生み出す役にしか立たない。「譯讀」の偏重は誤りであり、翻譯などというプロセスを飛びこす訓練が大事である。日本人の教師に習つても語學は上達しない。ネイティブについてとにかく會話を心がけよ。それも赤ん坊のころから、バイリンガルをめざして勵むべしである。

——單純化していえば以上のような「語學」觀、およびそれと表裏一體をなす「教養」蔑視に正面から異を唱えねばならないというのが、齋藤さんと僕の信念である。

事柄を一般化していへば、私達は何か異質なものを所有しようとする時、自分とその對象の間に幾つかの中間項或は手順を設定して、それらのものを着實にこなさなければならぬ。それが異質であればあるほど、中間的なものは一見ややこしくならざるを得ないであらう。對象との、それに根差したやりとりにおいては限らない訓練と反復練習が必要になる。音楽や運動競技はさういふ手順を経ることなしには上達がおぼつかないのである。

然るに何故、外國語（特に英語）の習得では、ただその言語にひたつてさへゐれば自然にわかるやうになるといふロマンチズムが横行するのか、そんなことでは肝腎のコミュニケーション能力だつて身につく筈がないではないかと兩氏は嘆いてゐる。

このことでは齋藤氏が日本語能力の重要性を説いてゐることも見逃せない。「こんな素晴らしい世界がある」ということを繊細に、鮮烈に感じ取るための意識化の仕組みは日本語でしかありえないわけで（中略）あ

くまで日本語を完全に、非常に繊細なレベルまで高めておいて、そして外國語を引き上げていく」ことが「日本人の外國語學習の一番健全なあり方だろう」と齋藤氏は述べる。ここにあるのは、主體がそれにふさはしくなければ、客體を取りこむことは出来ないといふ至極まつたうな言語觀である。

外國語を受容する基盤は文化であり、實用そのものに何等悪いところはないとしても、實用主義、少なくとも實用萬能主義は文化を押しつけた皮相淺薄なものならざるを得ないといふ眞理を齋藤、野崎兩氏は異口同音に訴へ掛けてゐる。人々の間でこの主張が眞剣に取り上げられることを願はないではゐられない。

次には翻譯のことであるが、今までに翻譯といへるほどのものをしたことがない私にはこの問題で生産的なことは言へさうもないといふ氣がしてゐる。さいはひ、私の周囲には矢野浩三郎氏、柴田耕太郎氏といった翻譯の大家が控へてゐるので、私は常々、氏等との雑談を通して翻譯の要諦を盗み取ることに心懸けてゐる。さういふ私に翻譯について確固たる識見があるわけではないのだが、仕事の中に外國語が少しは入りこんでゐるところから、いささか心もとない翻譯觀を持させてゐることも事實である。その一つを臆面もなく披露すると、翻譯書の讀者は原作者の生命のリズムと翻譯者の生命のリズムの兩方につきあふことを餘儀なくされるのではないかといふ氣がする。この二つが一致した翻譯は讀者に快感をもたらすが、ばらばらだと讀者は苦痛を強ひられる。野崎氏がバルザックを翻譯してゐた時、バルザックの毒にあてられて、朝起きても目が腫れてゐて開けられなかつたといふユーモラスな挿話は私の考へを裏書きするものやうに思はれた。

この考へは、もし可能であれば、翻譯書より原書の方を讀んだ方がい

いといふ考へに通じてゐる。その方が原作者の生命のリズムに直接觸れることが出来るからである。しかし野崎氏は、「原語で讀めるものなら原語で讀んだほうがいい、翻譯は結局必要悪なんじゃないか」といふ「偏見」を今の學生の認識不足の一例として擧げてゐる。兩氏とも翻譯に積極的な意義を見出ださうとしてゐるのであり、私も自分の考へを修正した方がいいのかも知れないといふ氣持に誘はれた。

「明治初期、翻譯という作業はすなわち自國の文學の創造でもあった」(齋藤氏)や「外國語との關係で日本語が新たな力を帯びる」(野崎氏)といふが如き歴史的事実は言はれなくてもわかかつてゐるが、これが日本の過去の一時期の話ではなく、「翻譯のあり方を通して、その時代における社會とか文化の方向性がすぐよく見通せる」(野崎氏)といふことになる、深く考へさせられるものがある。「いろんな時代にいろんな翻譯があるのを通して見ることで、さらに原作が深く讀めるという意味合いもある」といふ齋藤氏の言葉も結局同じことを指してゐるといへよう。

翻譯のこゝを通して問はれてゐるのはやはり文化の質であり、意味だけあつて深みも綾もない日本語が兩氏から檜玉に上げられる。

「いまの日本は平坦な日本語というか、口当たりのいい日本語が書き言葉をも支配している」(野崎氏)、「ただ口當たりのいい日本語だけであつて、それは異國の言語というものと本氣で向き合つたことがない。つまり、言語體系がどうしても貧弱……」(齋藤氏)。

最後に文學であるが、私にはいろいろのことが言へさうなこの論題について、是非言つておきたいと思ふことは案外少ない。それは齋藤、野崎兩氏の文學論が讀んでゐて面白くないとか、共感出来ないとかいふことではなく、逆に兩氏の所説から随分教はつたのであるが、自分の感想

を短くまとめることは出来さうもない。とはいへ十九世紀イギリスの小説家ディケンズを中心とする議論は重要なので、これに目を向けておくことにしよう。

野崎氏はディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』を翻譯で讀んで感動し、フランスのバルザックはディケンズには及ばないと感じたのであるといふ。「小説としての器の大きさということでは、すぐバルザックが頭に浮かびますけど、ディケンズのほうがはるかに大人ですよ。視野が広いと思う」。

これは平凡な指摘であるとは言ひ條、英文學者ならぬ佛文學者の發言であることが私の興味を唆る。最初にも述べた通り、一頃までの佛文學者はかういふことをあまり言はうとはしなかつた。バルザックは偉いがディケンズは下らないと勝手に決めつけてゐるやうな専門馬鹿はさすがに少なかつたとしてもである。

私達が必要としてゐるのはイギリスとフランス——他の諸外國に關しても事情は同じ——の獨自性がそれぞれ極限まで尊重されながら、しかも兩者の關係においてそれらの國々が相對化される視野の獲得である。兩氏がディケンズ談議の延長として展開させてゐる英佛比較はさういふものとして讀めた。

「同じ西洋文學とはいへイギリスとフランスの近代以降の文學を比べると、讀者との關係も違えば、それを書いてゐる主體の意識もずいぶん隔たりがある」、「文學創造を取り巻く共同體のあり方はかなり違ふ」といふのが野崎氏の意見である。齋藤氏はそれを受けて、「イギリス文學の場合、少なくともビクトリア朝の讀者は作家にとっては大事な大事なお客さんで、それがその作家を支えていた。ディケンズにとってはそれこそ『お客様は神様』ですね」と記してゐる。野崎氏はかう言はれて次

のやうに述べた。「フランスの場合もちろん『お客様は神様』であるはずなのに、なぜか詩人や作家自身の方が『神様』になっちゃうんですよ。読者なんか知るかという顔をして前衛的難解さに走る。すると逆にコアな読者たちがついて、ムーヴメント化していくというパターン」。

私はこの箇所を讀みながら、自然に近代日本文學のことを考へた。私達の文學の状況は、よきにつけあしきにつけ、或る時期まではフランス的であり、そして今では（多少微妙ではあるが）イギリス的になりつつあるのではないかと思はれる。

外國語と外國文學を論じながら、折に觸れて日本語と日本文學への反省を促すことがこの對談集の魅力である。が、日本語の使ひ方で一つだけ註文をつけておくと、「ありえる」はなるべく「ありうる」と言つてもらひたい。

これから外國語と外國文學を研究しようとしてゐる人は、いや、研究といふやうな固苦しいことから離れて單に外國語と外國文學を覗かうとだけしてゐる人も、この本に一度は目を通しておくことが望ましいと思ふ。私個人としてはここに名を連ねた二人の俊秀の今後の仕事ぶりに注目して行きたいと考へてゐる。